

芸能人向けリハビリ施設（ダルク）の設置を

懲りないなあと思う。覚せい剤取締法違反（所持）容疑で逮捕された人気女優、酒井法子容疑者（38）のことではない。これを報道するメディアの狂騒ぶりについてである。過去の芸能人による薬物事件と同じくハイエナのように事件に群がり、センセーショナルな報道を繰り返している。今回も格好のニュース素材（飯の種）として“消費”し尽くすのだらうと思うと、絶望的な思いがする▼人気商売とはいえ、かつて清純派アイドルの旗手だっただけに、逮捕されて「ヤク中」と分かったことでその落差に驚き、今度は世間を欺いたとして堕ちた偶像よろしく、こぞって彼女を激しく指弾する。このときメディアは、誰も批判できない社会正義や社会防衛の絶対権力を衣にまとい、この種の薬物事件の解決に向けての大事な視点を封じる役割を演じてしまっている▼本当は、こうしたバッシング報道からこぼれ落ちるところに覚せい剤や大麻、合成麻薬など薬物事件の本質がある。その本質とは一様に、依存症という困難な病気を伴うことにある。同じ法治国家に生きる者として、彼女の法を犯した行為が犯罪として立件されれば、処罰されるのは当然のことだ。だが、この種の事件では社会的制裁や法的な処罰を与えただけでは何ら問題は解決しない▼報道によれば、酒井容疑者はヤク中だった夫に勧められ、今年の夏ごろから覚せい剤を使用し始めたという。そうだとすれば、もはや立派？ な薬物依存症者である。自分ではうまく使っていたと思い込んでいても、日常生活は次第にクスリに支配されていたはずだ。このままだと身を持ち崩すのは時間の問題で、身体や精神への影響を考えれば、これをきっかけに回復のレールに乗れるなら逮捕は彼女の人生にとってプラスとなる▼ワイドショーやニュース番組などでは、一見もの分かりのよいポーズでキャスターやコメンテーターらが「これを機にしっかり更生してほしい」などと説教をたれる。だとするなら、センセーショナルなバッシング報道の中に、依存症治療の視点をきちんと盛り込むべきではないのか。この問題では日本で20年以上の歴史を

刻むダルクの経験や考え方が最も参考になる ▼ダルクでよく言われるように、クスリ（依存性の違法薬物や市販薬、処方薬など）は相手を選ばない。芸能人であろうが一般人であろうが、薄氷を踏むように薬物依存症者に仕立て上げられる。怖いのは次第に耐性ができ、使用量を増やさないと効き目が弱くなること。そうして自分の体が蝕まれていく恐怖にある。誤解しがちだが、依存症にとって意志や愛情、根性などの精神論はほとんど無力である▼大事なことは、自分が薬物に対して無力だと悟ること。そのためには、もはや自分の力ではどうにもならないという「底突き」体験を経ることだ。今回の事件で、酒井容疑者は地位や名誉、財産、社会的な信頼や信用、貴重な人間関係など、これまで築いたものをほとんど失うだろう。それは底突きに向けた重要な環境要件でもある。周囲は下手な温情を掛けずに、彼女が早く底突きできるように厳しく見守ることが肝要だ▼彼女の不幸は今回逮捕されたことではなく、たまたまクスリと出合ってしまったことにある。クスリを使った行為は否定されるが、彼女自身は否定されるべき存在ではない。残念ながらメディアの激しいバッシング報道で、ますます薬物依存症者の回復支援の声がかき消される懸念を抱く。彼女を商品として飯の種にしてきた芸能プロダクションは、今度は彼女の更生に向けて本当に手を差し伸べるべきだ。そのためにも芸能人向けのリハビリ施設（ダルク）が必要になる。（市）

※筆者プロフィール＝市毛勝三（いちげ・かつみ）元地方紙記者。現在はフリージャーナリスト。ダルク支援者の一人で、薬物依存症問題などをテーマに据える。著書に「漂流の果てに」「我ら回復の途上にて」「少年犯罪論」など。コラムは随時掲載します。